

A-2 地震津波を乗り越えた知恵と祈り

房総半島は沖合に2つのプレートが沈み込み、世界的にも地殻変動の激しい地域といわれ、およそ 200 年ごとに巨大な地震が起きている。館山は7千年の間に約 35m 隆起しており、日本で最も隆起した場所と考えられ、その速度は世界一だという。海岸段丘や内陸2kmにあるサンゴ地層、200 万年前の海底地すべり地層、断層など、貴重な地質遺産を見ることができる。

歩いて渡れる沖ノ島では、縄文海進と激しい隆起や沈降の繰り返しにより、干潮時のみ海岸線に現れる海底遺跡が発見されている。館山湾岸に平行している道路や線路はかつての海岸線で、隆起した砂丘列ごとに集落や新田、まち並みが形成されてきた。鴨川市の大山千枚田は、地すべり地帯の復興と災害防止の知恵でもある。

地震や津波のたびに困難を乗り越えた人びとの教訓は、信仰や祭礼の形となって、今に伝えられている。



館山湾の海岸段丘



赤山地下壕内部の地層



沼サンゴ層（千葉県指定天然記念物）



洲崎の海岸線変化

◎地形の移り変わり～歩いて渡れるまで（館山湾の沖ノ島）



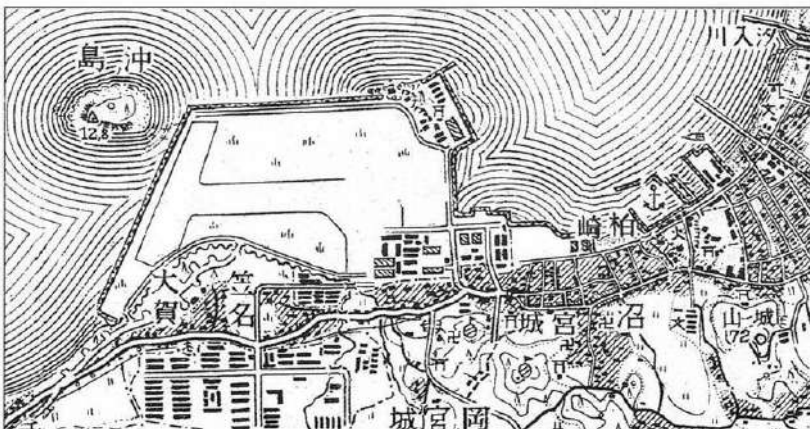
1923(大正12)年関東大震災以前の柏崎から大賀にかけての海岸。高ノ島との間の浅瀬は、元禄地震以後徐々に出来上がったもの。「大賀」の文字の上が「ピリドの鼻」。

「北条」
1903(明治36)年測量



関東大震災の隆起により宮城と笠名の間を中心に砂浜が広がった。柏崎には大きな砂州ができ、干潮時には高の島まで歩いて渡れるほどの浅瀬になった。

「館山」
1929(昭和4)年修正



浚渫と埋立によって1930(昭和5)年に館山海軍航空隊の基地ができた。高ノ島と隆起した浜がその一面に取り込まれた。沖ノ島はまだつながっていない。

「館山」
1944(昭和19)年修正

館山市立博物館『鏡ヶ浦をめぐる歴史』より

※戦後10数年の間に、潮の流れによって漂砂が溜まり、沖ノ島へ歩いて渡れるようになった。

●大規模海底地すべり（200 万年前の巨大地震）の痕跡

館山市稲地区から南下する農業用道路(安房グリーンライン)の建設中、南房総市白浜町の山中から、約 200 万年前の大地震の痕跡を示す巨大な露頭が発見された。高さ最大 13m、幅 50m、面積 400 m²に及ぶ。

森林農地整備センター資料によると、巨大地震の発生により、房総沖の海底斜面で液状化した砂層とブロック状になった砂岩と泥岩の互層が、海底地すべりとして斜面を流れ下りて乱堆積層を形成し、長い時間をかけて隆起したものであるという。砂岩、泥岩の層が分断、粉碎、回転し混沌とした珍しい地層になっている。



●相浜の津波

1703(元禄 16)年 11 月 23 日、安房白浜沖を震源として、マグニチュード 8.2 に相当する巨大地震が発生した。元禄大地震と呼ばれるこの地震は、丑の刻(深夜 2 時頃)に起きたため、被害は甚大になったという。館山市相浜では津波で家屋 67 軒、船 76 隻が流され、犠牲となった 86 人の供養塔が正覚山蓮壽院に建てられている。

1923(大正 12)年 9 月 1 日の関東大震災でも、洲崎方向から起きた津波が平砂浦から巴川を勢いよく逆流した。河口部の相浜では 9.33m の津波に家屋 70 軒、漁船 119 隻が流失したが、220 年前の教訓を語り継いでいた人びとは、高台に避難し犠牲者は 1 人だったという。

●津波から命を救ったサイカチの木

館山市図書館に近い住宅街の路地に、サイカチと呼ばれる老木がある。漢字では「皂角子」あるいは「皂莢」と書かれ、発音が「再勝」に通ずるため、縁起の良い木として大切にされてきた。幹や枝に鋭いトゲがあるので、門や柵の周囲に植え、転じて鬼門除けでもあった。1703(元禄 16)年の元禄地震ではこの木によじ登って津波の難を逃れたという逸話がある。

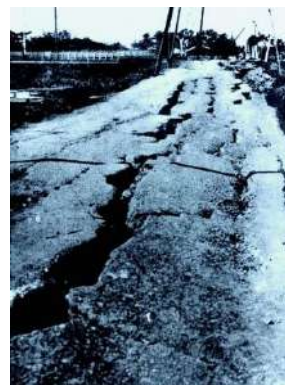
いざという時には、葉が食用、実が洗剤、トゲが解毒剤になり、暮らしに役立つという知恵の木でもある。伐らずにこの木を残してくれた先人たちの想いに耳を傾け、いざという時に備えて語り継いできた。2014(平成 26)年には「六軒町のサイカチの木」として館山市天然記念物に指定されたが、2019(令和元)年 9 月 9 日の台風 15 号で被災し、根元から倒れてしまった。



●関東大震災の傷あと

1919(大正8)年、安房北条駅まで鉄道(房総西線)が開通してからわずか3年後、1923(大正12)年9月1日午前11時58分に激震(M7.9)が起きた。相模湾北西部を震源とし、安房でも甚大な被害を受けた。なかでも館山湾に面した旧館山町・北条町・那古町・船形町などは、全半壊や火災焼失した家屋が98%にのぼった。

『安房震災誌』を見ると、「房州沿岸の隆起は、北条館山約6尺、館山の高ノ島約7尺、沖ノ島約8尺、富崎西岬約8尺、船形約5尺、白浜和田約4尺、鴨川約3尺(1尺=約30cm)」という。翌2日にも外房沖で大きな余震が続いた。」と記録されている。



●安房郡震災復興会のあゆみ

千葉や東京への道路や鉄道が分断し、館山は陸の孤島となったが、翌日には、安房郡内の山間部より各村の青年団・軍人分会・消防組などの救援隊が北条・館山・那古・船形町へ駆けつけた。

北条病院と諸隈医院以外の医療機関は倒壊。館山町の負傷者は水産講習所へ収容し、応急手当の救護所となった。4日には千葉県赤十字社と銚子の医師団が到着。館山病院と鈴木病院は建物が倒壊したが、無償で傷病者の手当を行った。住宅や家族を失った医師らも救護にあたり、住民も力を合わせて助け合ったことにより、心配された伝染病の蔓延は予防できたという。

9月29日、安房郡長・大橋高四郎は町村の首長と各復興会の代表を招集して、安房郡震災復興会(小原金治会長 → P.37)を組織、地域を挙げての協力体制をとった。海底隆起した館山湾は遠浅の海となり、干潟で歩いて渡れるようになった高ノ島や海岸沿いでは鉱泉が湧出。海水浴などの観光振興を通じて震災復興が図られ、宿泊施設は震災前を上回っていった。



館山市の被害状況 (「安房震災誌」より)

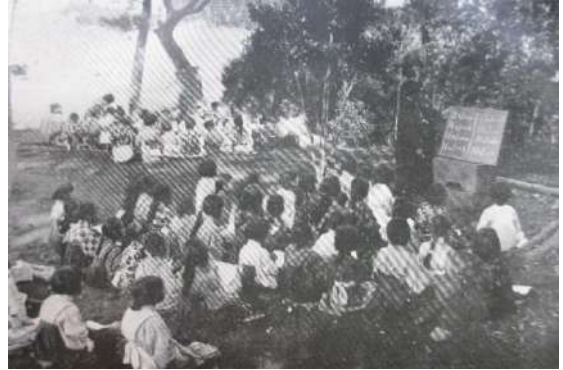
町村	全戸数	全壊戸数	半壊戸数	焼失戸数	流失戸数	家屋被害率	死亡者	負傷者
北条町	1,616	1,502	47	18	—	97.0%	230	1,040
館山町	1,678	1,455	153	55	—	99.1%	116	152
那古町	900	870	18	—	—	98.7%	125	300
船形町	1,178	625	139	340	—	93.7%	133	290
西岬村	793	107	146	—	1	32.0%	10	12
神戸村	563	197	81	1	—	49.6%	11	5
富崎村	580	15	19	—	70	17.9%	1	6
豊房 (神余)	722	314 (内 88)	204 (内 40)	—	—	71.7%	31 (内 12)	32 (内 4)
館野	507	478	11	1	—	96.9%	50	28
九重	462	372	60	1	—	93.7%	20	40
合計	8,999	5,935	878	416	71	81.1%	727	1,905

●学校の被害

各町村の小学校は、多くの校舎が一瞬にして倒壊し、図書や学用品なども一切失ったが、始業式後ではほとんどの児童は下校し、校内における死傷者は少なかった。

北条町は校舎8棟が全潰、児童と訓導各1名が亡くなった。9月26日より林間学校開始。館山町は校舎7棟倒壊、9月23日に館山町復興会を組織し、授業再開に尽力。那古町は校舎全潰、数ヶ月授業中止となった。船形町は校舎1棟全潰2棟半潰、9月13日から野外授業開始。西岬村は西・東小学校とも校舎倒壊。神戸村も校舎倒壊。富崎村は建物傾斜、9月19日より授業再開。豊房村では校舎倒壊、10月10日から南条八幡神社で林間学校再開。神余小学校も全壊、10月7日に仮校舎落成。畑校舎は60度傾斜、10月3日より再開。館野村は校舎倒壊、9月28日から露天教授再開。九重村は新旧校舎とも全潰、10月3日から三島神社境内の仮教場再開。

県立安房中学校では生徒を退避させた後に教員1名(柳悦多→p.33)が亡くなり、安房高等女学校では、校舎で6名、寮で2名の生徒が亡くなっている。



小学校児童の学習状況 「安房震災誌」より

●大震災を語り継ぐ

関東大震災から3年後の1926(大正15)年9月、高ノ島に高さ4.4m幅1.75mの「大正地震記念碑」が建てられた。篆額は徳川家達、撰文は千葉県知事元田敏夫による。

「…震源在相模洋以房総相武四州沿海之地受其殃甚如東京横浜猛火随起都市大半燬焦土死者十余万傷者不知数資材失四十億円政府布戒嚴令置救護事務局…」とあり、安房郡の被害や復興支援などの詳細、安房郡震災復興会を組織して官民一体となって復興に努力したことなどが記されている。

1926(大正15)年6月には、千葉県安房郡教育会から『千葉県安房郡誌』が発行された。もともと大正天皇即位の記念事業として、1919(大正8)年出版予定であったが、財政問題や郡制廃止で出版が延びていたところ、震災に遭遇、大変な苦勞のなかで完成したと記されている。その意味でも関東大震災後の復興期に発行された『千葉県安房郡誌』が果たした意義は大きく、なかでも巻末に記載されている『震災誌』は、貴重な記録といえる。



●朝鮮人を保護せよ

『安房震災誌』によると、震災直後、郡当局が最も苦心したのは、不安と失望に満ちた人心を平静に導くことであったという。食料略奪などの流言飛語を鎮静化し、住民に安心を与えた。特に東京の朝鮮人騒ぎ(※)が伝わり、その影響を危惧した大橋高四郎安房郡長は、この不穏な噂を打ち消し、「この際朝鮮人を恐れるは房州人の恥辱である」「もし朝鮮人が郡内にいるなら恐怖しているに相違ない、十分の保護を加えるべし」という旨の掲示を出した。この配慮により「安房に忌まわしき朝鮮人事件の一つも起こらなかった」と特筆されている。



震災観音堂

※ 朝鮮人騒ぎ＝

東京や千葉県北で、朝鮮人が暴動を起こすという流言飛語により、多くの朝鮮人が殺害された事件で、その数は6,000人を超えるといわれる。

◆光田鹿太郎 = 孤児に愛を与え、震災を救済したクリスチャン = 1880(明治13)～ ?

岡山生まれ。福祉の父と呼ばれた石井十次(1862～1914)のもとで岡山孤児院の事務を執り、鎌倉・東京を経て、1916(大正5)年、北条町新塩場に千葉県育児園(県内初の孤児院)を開園。

関東大震災で園舎は倒壊したが、園児は助かった。被災者救済のため、炊出しや寄付があると自ら背負って配給のため奔走した。特に激しい余震のなか、被害甚大な町村の実情を精査し、教育上・歴史上・科学上有効な材料とするために危険を冒して震災状況の写真撮影をした。医薬品や配給物を補うため、館山湾に停泊していた軍艦に直訴して大阪まで乗船、関西方面の知人を頼って救援物資依頼の演説会を各地で開催、布団など1千点余の支援を仰ぎ、熱意と犠牲的精神をもって被災者の寒さと飢えを救った。キリスト者として聖アンデレ教会の再建にも尽力。『安房震災誌』では善行表彰された記録がある。その後、育児園は館山町沼(館山小学校裏手)に移転したが、戦争の混乱を経て、戦後の消息は不明。



もりよし

◆長沼守敬 = 日本彫塑界の創始者と震災供養レリーフ = 1857(安政4)～1942(昭和17)

岩手県一関生まれ、彫刻家。イタリア王立美術学校に私費留学し、伝統的な彫刻を学び、東京美術学校に彫塑科を開いた。引退後の1914(大正3)年から館山町に居住。親友で建築家の辰野金吾も、晩年をともに館山で暮らそうと約束し、徒歩3分の距離に別荘をもっていた。

関東大震災に遭遇し城山に避難。親しくしていた近所の堀口家の老婦人と2歳の孫娘が亡くなったのを悼み、北下台(ぼっけだい)の観音堂墓所に、2人の供養レリーフを制作している。

